

J **apanese text**

2016年 春/夏号 日本語編



オーレリアンの夏

写真・文・切り絵=今森光彦
写真=今森真弓 (p.84、88 今森さん)、佐藤竜一郎 (p.87 制作風景、作品右上)

p.084

里山を見つめる写真家・今森光彦さんが、滋賀県仰木地区にアトリエを建てたのは25年ほど前のこと。周辺にコナラやクヌギを植えて雑木林をつくり、畑、あぜ道、ため池もつくって、1000坪ほどのコンパクトな里山環境を自らの手で生み出してきた。8年前、オオムラサキが庭のエノキに卵を産みつけるという一大事件が起こり、この環境がとうとう成熟に至ったことを知る――。

(p.085)

オーレリアンとは

ラテン語の「黄金」に由来する「オーレリアン」ということばは、マダラチョウ科やタテハチョウ科の仲間に見られる金色の蛹さなぎにたとえられ、広い意味で、チョウを愛する人たちのことをいう。ここでは生きものを見つめながら暮らす、今森さん自身を指している。

左：真夏の棚田は緑一色。汗をたらしながら炎天下を歩くのも、なかなか楽しい。

右上から：夏空のように澄んだ帯文様の、アオスジアゲハ。アトリエの庭を賑わしてくれる生きものの中でも、アゲハチョウの仲間が一番華やかだ。体が大きく、飛び方も優雅で機敏なので目をひく。

近くの田んぼからやってきたアマガエル。カエルの仲間は、今までに敷地内で9種類確認している。

庭で採れた野菜たちは、農薬をまったく使わず、苦難を乗り越えてで上がった汗の結晶だ。

美しいピンク色の花を夏に咲かせるモナルダは、玄関や軒下に吊るしておく、葉のよい香りを冬まで楽しむことができる。

繁殖力旺盛のモナルダに比べフレンチラベンダーは、粘土質の土壌のせいなのか、敷地内でももっとも増えにくい植物のひとつ。

キリギリスの鳴き声は、夏を象徴する心地よい音色。タマネギの切れ端を与え丁寧に飼うと、1カ月ほど鳴いてくれる。

チョウを呼ぶ

p.086

緑濃い夏のアトリエは、チョウたちで賑やか。キアゲハ、モンキアゲハ、クロアゲハ、ナガサキアゲハなど、大柄なアゲハチョウたちは、乱舞がダイナミックで、見るものの心を躍らせる。

チョウが集まる庭は、里山ガーデンのひとつの目標だった。チョウに来てもらうコツ。それは、花と食草をいかに植えるかだ。花は、チョウの成虫のためで、食草というのは、幼虫のため。チョウは幼虫のときは、植物の葉を食べている。ただ、どんな葉でもいいかという、そうではなく、チョウによって好みははっきりとしている。幼虫のエサになる植物のことを食草というのだ。

花は、夏咲きの花で蜜の多いものを選ぶが、問題は食草の植え方。食草は、樹木の場合と、草の場合がある。これらを数多く植えるとなると、庭のレイアウト全体に影響を及ぼすことになる。

私は、雑木林の空間と畑の空間に分けて、具体的にチョウの種類を思い描きながら木を植えていった。その数は、大きな木だけでも10種類を超えるが、とりわけこだわったのは、エノキだった。エノキは、オオムラサキ (左下写真)、ゴマダラチョウ、ヒオドシチョウと、里山の御三家を養ってくれる大切な木。樹形はケヤキによく似ていて、幹をまっすぐ伸ばし大きく枝を張る。雑木林の中でみんなといっしょに背比べする木ではなく、植えるには、広い空間が必要だ。御三家のチョウたちは、みんな飛翔力があり、十分な広場がないと遊んでくれない。長年の観察経験を生かして敷地内で最適な場所を選ぶことにした。

もうひとつ気をつかったのは、アゲハチョウたちの食草。アゲハチョウはミカン類が好きで、なかでもカラタチとカラサザンショウには目がない。カラタチは、なかなか大きくなりから、アトリエを建てる3年前から準備し、50本くらいの幼木を植え込んだ。25年たった今は、背丈を超える垣根になって、強剪定を繰り返している。黄色い実がなり純白の花も咲く。毎年、この木から巣立ってくれるアゲハチョウは、

数え切れない。一方、雑木林の縁に植えたカラスザンショウも、すっかり大木になり、やはり、一定の高さで剪定をしている。この木は、野生種だけれど、カラタチより利用するアゲハチョウの種類が多く、とても重宝する。

このように、アトリエの木や草は、慎重に場所を選びながら、ひとつずつ増えてきた。環境が整うまで、数年の歳月が必要だったが、とうとう8年前の夏、私にとって嬉しい出来事が起きた。オオムラサキが、ついにエノキに産卵してくれたのだ。ある日、樹高8mほどに育った木の梢にぶら下がっている大きなチョウがいるなと思ったら、それは、オオムラサキのメスで、腹部を曲げて卵を産んでいた。オオムラサキは、環境にうるさいチョウなので、いよいよアトリエの庭も里山の仲間入りか、と思わずほおが緩んでしまった。

今日も窓の外では、木もれ日を浴びながら、大小さまざまなチョウが行き交っている。

今森光彦 (いまもり・みつひこ)

1954年滋賀県生まれ。写真家、ペーパーカット作家。第20回木村伊兵衛写真賞、第28回土門拳賞などを受賞。著書に『里山物語』(新潮社)、『里山を歩こう』(岩波書店)、『湖辺(みずべ)』『萌木の国』『今森光彦の心地いい里山暮らし12か月』(いずれも世界文化社)など多数。

p.087

今森さんのもうひとつの顔、それはハサミ一本で自然の造形を鮮やかに切り取るペーパーカット・アーティストだ。里山のアトリエの庭づくりを始めて2、3年たった頃、子どもたちとクリスマスツリーの飾り付けをしていたとき、ふと小学校のときペーパーカット遊びに夢中になっていたことを思い出す。ハサミを持つと、まるで昨日のこのように手は覚えていて、瞬間に何種類ものチョウが切り出されたのだ。以来、創作への熱狂がよみがえる。ペーパーカット作品の著書、展覧会も好評を博してきた。ファインダーを通して出会ってきた世界中の生きものたち、そして身近な里山の自然。周りの命を見つめる目、命に対する好奇心が、今森さんのすべての表現につながっている。

上から時計回りに：バブアニューギニアだけに棲む世界最大のチョウ、アレキサンドラトリバネアゲハがハイビスカスにやってきたところ。実際の作品の大きさは94×63cm。

多色立体作品は、実はシンプルな構造になっている。

ペーパーカットをする部屋は、窓を大きくとってある。木々越しに棚田が見え、遠くに比良山が眺められる。制作を始めると、知らず知らずのうちに部屋中がこの状態。一本のハサミだけで次々と形を切り出す。原色に輝くハチドリは、どのように表現しようかと、いつも頭を悩ませる。熱帯雨林で出会ったときの感動を、紙を使って呼び起こしたい。

里山 夏のできごと

p.088

照りつける日差しのもと、里山がひときわエネルギーに満ち溢れるこの季節。オーレリアンの庭で出会う生きものたち、食卓を彩る自然の恵みについて今森さんが綴る。

6月

里山の収穫仕事

アトリエに8本ほどある梅の木は、大変よく結実する。ただし、採る時期を見逃してはいけない。早すぎると実が小さいし、熟れすぎると黄色くなって、梅干しなどに向かなくなる。毎年、友人たちが集まって、それぞれが1年分の梅酒、梅ジュース、梅干しを作るのに十分な量を持ち帰る。

7月

里山を味わう

上から：夏は、スパイスを20種類くらい調合した特製のカレーを作る。ターメリックライスの下に敷くのは、ホオノキの葉。甘い香りがするので、森の風味を醸しだしてくれる。ホオノキは里山の樹木の中でもっとも葉の大きな植物で、私が大好きな木だ。雑木林の中よりも日が当たる周辺に植えると大きく育つ。ミントは、ブuddleアの下に植えてあるものが広がった。定期的に摘みとって、お茶にするほか、サラダにも使う。半日陰に群生するミョウガも、そのまま切って生ハムといっしょにサラダにすると美味しい。

8月

里山の生きものたち

左奥から：日が落ちて、あたりが薄暗がりになる頃、せわしく飛び回るホウジャクというガ。ホバリングしながら長い口吻を伸ばして、花の蜜を

吸っている。

最近では低農業にする農家が増えたので、初夏から秋にかけて再び数多く見られるようになったトンボ。敷地内のため池や近くの田んぼの水路などで繁殖しているのだろう。写真のシオカラトンボは、茶色っぽいのでメス。オスは、くすんだ青色をしている。

クモの仲間も自然度を測るバロメーター。写真のナガコガネグモのようにとくに大型のクモは、環境のよし悪しによって数が変動する。彼らに、そつぽを向かれない庭づくりを目指したいと思う。

右手前から：野菜は収穫ばかりでなく、花も楽しめる。なかでもオクラは上等で、薄いレースのような花びらが涼しげだ。

ヨウシュヤマゴボウは、鳥によって運ばれる植物のひとつ。鳥が糞をこぼした後から芽生え、夏には背丈を超えるほどに生長する。黒く熟した実を狙う鳥たちのために、アトリエでは、場所を決めて大きくするようにしている。

夏に黄色くなる小さなエノキの実も、鳥たちは目ざとく発見する。木の実が少ない季節の、貴重な食料だ。その種もまた、いろんなところに運ばれる。